

## 『我らが共通の友』と『白痴』

### 愛と破滅の物語

#### *Our Mutual Friend and The Idiot:* The Stories of Passionate Love

及川 陽子

Yoko OIKAWA

ディケンズとドストエフスキー (Fyodor Dostoevsky) は、それぞれ『我らが共通の友』(*Our Mutual Friend*) および『白痴』(*The Idiot*) において愛が引き起こす犯罪を描いた。一方は殺人未遂に終わり、他方は殺人事件となるが、事件の過程においていくつかの共通項を持つ。それぞれの犯罪行為をめぐる人物の相関関係や事件の経過及び結末から、彼らが抱いていた共通する社会的な悪への並外れた関心が浮かび上がってくる。彼らの作品には、悪の定義、その原因、善の定義、そして悪と善との関係が描かれ、紆余曲折を経て同じ結論が描かれている。<sup>1</sup> それぞれの作品が実際の、あるいは道徳的な罪にふさわしい罰、という結論を導くのは作者たちの社会的な悪に対する考え方の類似性である。<sup>2</sup> また、犯罪者の描写が優れているという事実からは、彼らが犯罪者にさえ一種の sympathy を覚える類似した感性の持ち主だったということが言えるだろう。<sup>3</sup>

愛の激情、愛の狂気に陥ってライバルに対する殺意を募らせる者たちは、ついには自らの破滅という悲劇を生み出す。その経過を類似の大前提とすると、愛のために身をひこうとする女性、気持ちの揺れる男性、そして愛のためにともに犯罪者となる男性の形象は作者たちによる類似性の高い犯罪心理の観察及び研究結果である。ここで取り上げるのは愛のための殺人であるが、特筆すべきはこれらがいわゆる探偵小説とは一線を画す流れを持つという事実である。これらは誰が犯人かを問う物語ではない。むしろ、小説全体の流れの中で培われていく殺意の過程およびその爆発の全貌である。<sup>4</sup>

愛する人のために自分を犠牲にして身をひこうとする女性がまず両作品に共通している。ドストエフスキーは、ディケンズの世界を踏襲するのではなく、逆説的に肯定していると言える。すなわち、ディケンズにおいて他人に頼らず自分の力で生きようとする女性が最後には幸せをつかむことになったことと対照的に、ドストエフスキーにおいてはそのような資質を持たなかったが故に悲劇的に生き、そして殺されてしまう女性が描かれている。これはともに自立や前向きな姿勢の肯定であろう。

『我らが共通の友』においてリジー・ヘクスム (Lizzie Hexam) は青年紳士ユージン・レイバーン (Eugene Wrayburn) に惹かれているが、身分の差を考えてその愛の成就を望まない。彼女は自分で働き、自分の愛を肯定し、心の支えとして生きている。<sup>5</sup> しかし身分の差がユージンの社会的地位に傷をつけることを思い、その愛のために身をひくことを決意する。脅迫的な求婚者ブラドリー・ヘッドストーン (Bradley Headstone) に対する時、彼女は自分の強さを自覚する。“With much of dignity of courage, as she recalled her self-reliant life and her right to be free from accountability to this man, she released her arm from his grasp and stood looking full at him” (OMF 398).<sup>6</sup>

リジーはブラドリーの強引な求婚にも負けず、またユージンの執拗なほどの接触から逃れるために自ら身を隠す。そしてついにユージンに見つかった時にも、心の震えを抑えて彼に告げる。“Respect my good name. If you feel towards me, in one particular, as you might if I was a lady, give me the full claims of a lady upon your generous behaviour” (OMF 693) .

ダービー (Darby) が言うように、その直後に彼らの間の “balance of power” が逆転する。<sup>7</sup> それは私心のない愛が勝利する瞬間であり、身分や階級の差を超えた愛が誕生する瞬間であった。そして同時に、父親への愛ゆえに彼の非法な仕事を手伝っていた彼女は、その技術でもって瀕死のユージンを救うことで過去の罪を償ったと言う事も出来る。<sup>8</sup>

一方、『白痴』においてはナスターシャ・フィリッポヴナ (Nastasya Filippovna) がリジーと同じ立場に立つ。<sup>9</sup> しかし彼女は汚された自らの運命を嘆き、恨むことでしか生きられない。その性質は全編を通じて彼女の不可解な行動の源であり、熱烈な彼女の崇拜者パルフォン・セミヨーノヴィチ・ロゴージン (Parfion Semyonovich Rogozhin) の殺意を喚起する一因となっていく。ハーディ (Hardie) は特に彼女の “selfwill, pride, and self-destructiveness” をその大きな要因として挙げている。<sup>10</sup> 汚れた女としての自覚に苦しみ続け、それらしく振舞うことに懸命な彼女は、しかしレフ・ニコラエヴィチ・ムシキン公爵 (Prince Lev Nikolayevich Myshkin = 以下

「公爵」)との出会いで“for the first time I've seen a human being!”という経験を。しかし、公爵の結婚の申し込みに狂喜しながら、彼女はそれを受け入れる事が出来ない。

“Prince, you ought to marry Aglaya Yepanchina now, not Nastasya Filippovna, otherwise Ferdischenko will point the finger at you. You're not afraid, but I would be afraid of ruining you and being reproached by you  
l a t e r . . .”  
(TI 180)

彼女は汚れた自分が公爵の人生を汚すことに恐怖を覚えて身をひこうとする。それでいて自分で生きるという明確な意志を持ってないまま、彼女はロゴージンと公爵との間を揺れ惑い、悲劇を生きる。しかしここで彼の最後の長編である『カラマゾフの兄弟』(The Brothers Karamazov)に登場する グルーシェニカ (Grushenka) にふれておきたい。グルーシェニカは「汚れた過去を持つ女」、あるいは「辱められた女」としてナスターシャの延長線上にいる人物である。しかし彼女は被害者意識だけで生きることはしない。ディケンズがその最後の作品でリジーという主体性を持って生きる新しい女性を描いたように、ドストエフスキーもまた、最後の作品においてナスターシャの悲劇を乗り越える女性を形成したのだった。<sup>12</sup>

また、令嬢アグラヤ・イヴァーノヴナ・エパンチナ (Aglaya Ivanovna Yepanchina) は精神的には社会運動に興味を持ち、自分で行動して人生を切り開くという夢を持つ女性である。しかしながら彼女は、自分の公爵への愛を認めることも出来ず、それでいて彼を責めるだけで何ひとつ成し遂げることが出来ないままにその運命を狂わされていく。ドストエフスキーは、自虐的であり過ぎることと同様に自分の足で立てない弱さに対しても悲劇を課している。それは、リジーのように生きられなかった彼女たちへの一種の罰であると言える。

次に自分の愛に絶対的な自信を持たずに揺れ動く男性という共通点がある。彼らは、心を決めかねている内にライバルの一撃によって運命を決められてしまう。それはナスターシャやアグラヤと同様に主体的に生きられなかった罰とでもいうような結果である。一方は揺るぎない愛情を手にするものの、瀕死の大げがをする羽目になり、もう一方は全てを失って白痴へと戻ってしまう。

法廷弁護士であるユージンは、リジーに惹かれながらもその怠惰な性質と生き方が災いして自分の気持ちを決めかねている。友との語らいにおいては冗談まじりに “Riddle-me, riddle-me-ree, perhaps you can't tell me what this may be? — No, upon

my life I can't. I give it up!" (OMF 295) などと軽口をたたくが、その悩みは深刻である。一方でブラドリーの執念をからかいながら、彼もまた、執念を持って姿を消したりジエを探し出す。しかし彼女の愛と決意の強さに涙したのも束の間、彼には死の一撃が下る。それは彼が本当の意味で再生するために必要な儀式であり、リジエによる彼の救助は、言い換えれば作者ディケンズによる彼の救済である。<sup>13</sup> そして彼はこの代償によってリジエとの愛を手に入れることになる。

他方、ムィシキン公爵は、ドストエフスキーの「無条件に美しい人間」という理想を担った人物であり、この悲劇の一因を担う人物でもある。<sup>14</sup> 彼の無垢な心には「人々の同情者になりたい」という願いが燃えている。<sup>15</sup> しかし彼は虐げられた女であるナスターシャだけではなく、汚れないアグラヤにも惹かれてしまう。彼自身は、アグラヤには“I love you, Aglaya Ivanovna, . . . I love only you. . . .” (TI 542) と言い、ナスターシャについては “I loved her out of compassion, not love” (TI 218) と語る。だがナスターシャやアグラヤ、そしてナスターシャを愛するロゴージンにとって、それは許すことのできない欺瞞であった。公爵はふたりの女性を愛して揺れ惑い、四人は愛の苦悩にとらわれる。そしてロゴージンの殺意が友人である公爵に襲いかかる。

Rogozhin's eyes glittered and a manic smile distorted his features. His right hand rose and something flashed in it; the prince did not think of stopping him. All he remembered was apparently shouting:

‘Parfion, I don't believe it!’ (TI 246)

公爵は自分をつけまわすロゴージンを知り、彼の視線を何度も感じていた。<sup>16</sup> しかしながら公爵は彼の殺意への驚きを口走る。この襲撃は公爵の癩癩の発作により未遂に終わるが、「美しい人間」の持つ宿命的な悲劇がここにはある。他人を傷つけないと願うその心が、無意識に他人をより傷つけてしまうことに、公爵は最後まで気付くことが出来ないのである。ついにふたりの女性が対決することになって、彼は最後まで愛と憐れみに揺れ惑う。彼の姿は潔癖な婚約者であるアグラヤを激怒させ、彼はナスターシャのもとに留まる。<sup>17</sup>

しかし、ロゴージンの影に怯えるナスターシャは再度彼のもとから逃げ出し、最終的にはロゴージンの手にかかって生命と落とす。公爵は愛する女性たちと美しい夢そのものをも失い、その衝撃のために白痴に戻ってしまう。この結末はドストエフスキーにとっては必至であったが、そこには心を決めることができなかった人間への苦い非難が見て取れる。<sup>18</sup> 公爵が払わなければならなかった代償は、それを罰というのは酷だとしても、彼が美しい人間であるだけ大きかったのだ。

最後に狂気にまで進む愛を抱く男性、その激しすぎる愛ゆえに身を滅ぼしていく人間の形象を見ていく。彼らは、抑圧されて歪んだ感情生活に生き、障害を取り除くことで愛を手に入れようとする。自分の激情を抑えられずに破滅への道を進んで行く、いわば必然的な彼らの破滅への序曲は、一目で彼らを虜にする女性との出会いであった。

ブラドリーは、卑しい生まれに劣等感を抱きながらも努力によって社会的な地位を得てきた青年である。彼はその上品な外見に似合わないくすぶったものを心に持っていると言われている。<sup>19</sup> そんな彼が教え子であるチャーリー・ヘクスム(Charley Hexam)の姉のリジエに会った時、彼の人生は狂い始めた。それは結果論として彼自身に破滅をもたらす出会いであった。

教師としての社会的な仮面の奥で、生まれながらの紳士であるユージンへの劣等感から嫉妬と怒りを燃やす彼は、着実に憎悪を育てていく。それは自分がかかわれているという意識、ユージンの存在がリジエの愛を遠いものにしていくという思い込みから、殺意へと変貌していく。ついにリジエに結婚の申し込みをして、拒否された時に彼の内部にあったその殺意は外部へと噴出する。

“Then,” said he, suddenly changing his tone and turning to her, and bringing his clenched hand down upon the stone with a force that laid the knuckles raw and bleeding; “then I hope that I may never kill him!”

(OMF 398)

彼の殺意は明確にユージンへと向かい、リジエを怯えさせるが、彼自身自分の抑圧された感情の行き場に無関心ではないことがわかる。そして同時にそれ以降当然のようにリジエの不安は募っていく。<sup>20</sup> ユージンの揶揄に耐えながら彼を尾行し続けるブラドリーは、次第に狂気の相を帯びてくる。“Looking like the hunted and not the hunter,” (OMF 544) という姿で夜な夜なユージンを追いかけて、殺人計画を綿密に立てていく彼の犯罪心理は克明に描かれている。<sup>21</sup> しかし彼の愛と憎しみに端を発する一撃は、別れを受け入れかけていたリジエとユージンとを逆に結びつける結果となる。殺害の失敗を知って呆然となるブラドリーは、秘密を知る脅迫者を道連れにして絶望のあまり死を選ぶ。彼は犯罪を後悔した訳でもなく償おうとした訳でもないが、全体として見るとその死はまさに犯罪者への罰として位置づけられる。

同様に愛の激情のために身を滅ぼしていくのが金持ちの商人の息子ロゴージンである。何度も“pale”と形容をされる、死の雰囲気を持つ彼は女王のように振舞うナスターシャに一目で惹かれ、彼女を追いかける始める。<sup>22</sup> 彼は何度裏切

られても、どんなに蔑まれても、決して諦めず狂ったように彼女を追い求めるが、それは狂おしい愛だけでなく激しい憎しみにもよる。<sup>23</sup> 公爵とは十字架を交換した義兄弟でありながら、やはり彼は公爵の憐れみと恐怖に基づいたナスターシャへの愛を恐れた。彼は自分のその思いが殺意であることを知っている。<sup>24</sup> 公爵との会見で、ナスターシャに対する愛と憎しみの ambivalence を指摘されたロゴージンは、“That I'll kill her?” (TI 223) と言い放つのである。公爵とナスターシャは彼の危険な殺意に恐怖心を持つが、彼らはもはや為すすべを持たなかった。

唯一のライバルすなわち公爵の殺害に失敗すると、ロゴージンに残されたナスターシャへの愛を貫く方法はひとつしかないように思われた。彼女を自分の世界に閉じ込め、本当に自分だけのものにするために彼は熱愛するナスターシャの胸を刺す。彼は自らの歪んだ愛の激情に屈して彼女を独占するが、同時に自分も脳炎に冒されてしまう。その後シベリア流刑という罰を受ける彼はもはや永遠に愛するナスターシャを失ってしまう。そしてそれこそが、彼の受けた最大の罰である。

一見まるで違うテーマを持ちながら、これらの作品は根本において類似性を持ち、異なる結末を迎えてさえ、作者たちの意図は同じように明らかになる。彼らは、ともに行き過ぎた恋愛感情、抑圧され、それでいて激しすぎる人間心理のひとつの結果としての犯罪を描き、そこに至る犯罪心理や犯罪に対応する罰の点で同じ結末に辿りついている。それが彼らの犯罪作家としての共通する特性であり、だからこそドストエフスキーはディケンズの作品を愛読し、参考にもあつたに違いない。それは模倣ではないのだ。彼らは多くの犯罪を通してそれぞれの生きる社会を描いたが、同じように作品によって社会を変えていこうと志していた。彼らは人間の心理状態を鋭い視線で観察し、そこに棲む悪を描いて実際の人間社会への警鐘としたのである。そして彼らの描いた悪という形象は当時のみならず現代に至るまでその普遍性を失っていない。

## 注

\* 本稿は平成12年6月10日に広島大学で開催されたディケンズ・フェロウシップ日本支部春季大会での研究発表をもとに加筆・修正をしたものである。

<sup>1</sup> John M. Robson, “Crime in *Our Mutual Friend*.” *Rough Justice: Essays on Crime in Literature*, ed. M. L. Friedland (Toronto: U of Toronto P, 1991) 115.

- <sup>2</sup> F. S. Schwarzbach, ““All the Hideous Apparatus of Death”: Dickens and Executions.” *Executions and the British Experience from the 17<sup>th</sup> to the 20<sup>th</sup> Century: A Collection of Essays*, ed. William B. Thesing (Jefferson, North Carolina: McFarland & Company, 1990) 103. 本質的な善は報われ、本質的な悪は罰せられるという思想がみられる。
- <sup>3</sup> Frances Harriet Isley Hardie, “Dostoevsky as Crime Writer: The Dangerous Edge.” (Diss. Vanderbilt U, 1980. Ann Arbor: UMI, c1980) 329. ドストエフスキー同様ディケンズも犯罪者の心理描写に優れていた。例として、『罪と罰』のラスコーリニコフ、『オリヴァー・ツイスト』のサイクス、そして『マーティン・チャズルウィット』のジョーナスなど。
- <sup>4</sup> Philip Collins, *Dickens and Crime* (London: Macmillan, 1962) 284. ディケンズはブラドリーの犯罪を“a psychological study and not a whodunit”として描いている。ドストエフスキーも同様である。
- <sup>5</sup> Charles Dickens, *Our Mutual Friend, The New Oxford Illustrated Dickens* (London: Oxford UP, 1959) 528. “I love him so much and so dearly, . . . I am proud and glad to suffer something for him.” 以下、この版からの引用はOMFとして( )内に頁数を記す。
- <sup>6</sup> これは、公爵とロゴージンの間を揺れ動くナスターシャにはない強さである。
- <sup>7</sup> Margaret Flanders Darby, “Four Women in *Our Mutual Friend*.” *The Dickensian* 83.1 (1987): 33.
- <sup>8</sup> Darby 31. ユージンを救ったのは、リジーの父が彼女に教えた「技術」である。
- <sup>9</sup> 江川卓、『謎とき『罪と罰』』(新潮選書, 1994) 107. 「ナスターシャの本来の名であるアナスターシャはギリシャ語の「アナスタセー」(復活)から出ていることが明らかであり、また、彼女の姓Barashkovaは「小羊」を意味する。皮肉にも、彼女は小羊として殺され、復活することが出来なかった。
- <sup>10</sup> Hardie 224; David K. Danow, “Diegesis in *The Idiot*.” *Language and Style* 22.1 (1989) 68. “[Myshkin’s] presence and contradictory behavior fires Rogozhin’s perverse imagination to distraction and murder.”
- <sup>11</sup> Fyodor Dostoevsky, *The Idiot*, trans. and ed. Alan Myers (Oxford: Oxford UP, 1992) 185. 以下、引用はこの英語版により、TIとして( )内に頁数を記す。
- <sup>12</sup> 中村健之介、『ドストエフスキー人物事典』(朝日選書, 1990) 434. グルーシェニカの頂、ナスターシャとの比較を参照のこと。
- <sup>13</sup> Darby 33. “. . . resolving to kill his character off and start again.”
- <sup>14</sup> 中村健之介編訳、『ドストエフスキーの手紙』(北海道大学図書刊行会, 1986) 213. 「姪 S. A. イヴァーノヴァ宛。可愛がっていたこの姪に、ドストエフスキーは「美しい人間」というこの小説の中心構想を述べるが、その時に Don Quixote と Pickwick に言及している。彼によると、美しさとは同時に滑稽さをも持ち、読者に思いやりを喚起するものであるという。また、ディケンズについては、Loralee MacPike, “Dickens and Dostoevsky; The Technique of Reverse Influence”, *The Changing World of Charles Dickens*, ed. Robert Gidding (London: Vision, 1983) 211 に次の記述がある。“Like [Dostoevsky], he [Dickens] sought approximations to the ‘perfectly beautiful man’.”
- <sup>15</sup> TI 614. 冷静な傍観者 Yevgeni Pavlovich Radomsky (エフゲーニー・パーヴロヴィチ・ラドムスキー) が、公爵のナスターシャやアグラレーヤに対する行動について彼を批評している。

実際にはここで「不幸で清純な女の救出」という小説の主題が明らかになる。

- <sup>16</sup> ロゴージンは倦むことなく公爵をつけまわす。至るところで公爵はロゴージンの“視線”を感じ、奇妙な感覚に襲われている。
- <sup>17</sup> *TI* 605. ナスターシヤに対する公爵の優しい愛撫は、宿命の夜に殺人者となったロゴージンに対するものと同じである。ふたりがナスターシヤの遺体を前に過ごす夜は、彼らの愛の終焉を告げる。公爵は自分で言うように、ナスターシヤに対しては愛よりも強い憐れみや同情を感じていたために、殺人者となった哀れなロゴージンに対する時に同じ行動をとったのかもしれない。
- <sup>18</sup> 中村『手紙』243, 「A. N. マイコフ宛」。「 . . . 以外な結末に多少はびっくりするかもしれませんが、少し考えて貰えば、まさにこういう終わり方をせねばならなかったと、当然思うことでしょう。」
- <sup>19</sup> *OMF* 218, ブラドリーには“what was animal, and of what was fiery”がある。
- <sup>20</sup> *OMF* 525. ベラへの告白において、彼女はその不安を吐露している。
- <sup>21</sup> *OMF* 546. “The state of the man was murderous, and he knew it.” この場合は would-be murderer の心理である。
- <sup>22</sup> 江川 184。「ロゴージンの謎」が読み解かれているので参照のこと。
- <sup>23</sup> Danow 70. “For Myshkin, she [Nastasya] is tortured; . . . For Rogozhin, she is torturer.”
- <sup>24</sup> *TI* 223. ロゴージンは公爵との会話において客観的に自分たちのライバル関係を分析してみせる。それによると、公爵の憐れみは彼ロゴージンの恋よりも強く、またナスターシヤは公爵の人生を壊すことは出来ないけれど彼ロゴージンには何をしてもいいと思っている。彼が憎しみと区別のつかない愛と独占欲によって彼女を求める激情に拍車をかけるのは、公爵への嫉妬である。